



Risk Flash No.79 (Vol.3 No.17)

発行：滋賀大学経済学部附属リスク研究センター

発行責任者：リスク研究センター長 久保英也

〒522-8522 滋賀県彦根市馬場1-1-1

TEL:0749-27-1404 FAX:0749-27-1189

e-mail: risk@biwako.shiga-u.ac.jp

Web page: <http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2>

- 環境の視点：環境保全と貧困削減の両立を目指して～焼畑からキャッサバ栽培へ～・・・Page 1
- 今週の論文紹介：彦根市観光に経済効果～彦根城周辺観光の拡張可能性～・・・Page 2
- 教員紹介：御崎加代子・リスク研究センター通信・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Page 3

環境の視点

環境保全と貧困削減の両立を目指して

焼畑からキャッサバ栽培へ

きむ びよん き
経済学科准教授 金 秉基

持続可能な開発と貧困削減の両立を目指した、国連持続可能な開発会議がリオデジャネイロで開催されました。地球環境保全のためには、途上国の協力は欠かせないものですが、極度の貧困や飢餓に苦しんでいる途上国の人々は明日の環境より今日の糧にありついてしまいます。今日を生き延びるための開発を優先する途上国では、伐木や焼畑で生計を立てている山間部が多くあります。焼畑は山の木を切り倒し、そこに火を入れて木や草を燃やします。燃やした灰は肥料になります。そこで1年間作付けをすると他の山に移り、何年か後に戻ってきます。この農法は環境に優しい伝統農法と言われていましたが、人口増加に伴い焼畑の面積が増え、その周期も短くなり、現在は環境破壊の一つの要因となっています。国際機関や途上国の政府は伐木や焼畑を止めさせようと努力していますが、その効果はあまり見えません。

アジアの最貧困国の一つと言われるラオスでは、焼畑をキャッサバ農場に転用する動きが出てきています。ある村では今まで焼畑で生計を立てていた少数民族が1つの村を形成し、焼畑跡地にキャッサバの栽培を始めました。キャッサバは痩せ地や乾燥に強く、栽培は熱帯と亜熱帯気候に適していて灌漑設備もなく、農薬を買うことすらできない東南アジアの山間部がその適地となります。キャッサバの用途は食料品、化粧品、工業原料、バイオ燃料など非常に広いです。また虫害に強く農薬は使わないので生産コストが低くすみずみです。そしてキャッサバの茎を30センチほど切って土に斜めに押しおけば約半年で収穫ができます。

キャッサバ農場を始めたのはラオス人実業家で2年前、焼畑を営んでいた少数民族の労働者400人ほどを集め、1千万本の苗をタイから購入し500ヘクタールの栽培を始めました。現在、1世帯当たりの平均収入は焼畑のそれを約18倍も上回っています。その結果、伐木や焼畑は減り、環境保全の意識も高まっています。一方キャッサバは収穫したままでは腐りが速く、加工をしなければならず、また加工をすることでその値段は4倍にも跳ね上がります。しかしラオスでは加工技術も工場を立てる資金もないのが現状です。加工は現在中国の工場に頼っていますが、利益の大部分を中国企業に取られてしまうような状況です。加工設備のための資金援助は、地域住民の貧困削減と環境保全の両立を可能にすると思います。

途上国の環境保全のためには資金援助や技術移転が不可欠ですが、先進国は財政難を理由に資金拠出を拒んでおり、今後の援助額の増額は見込めない状況です。20年前、国連持続可能な開発会議で12歳の子供が「どうやって直すのか分からないものを壊し続けるのはやめて下さい」と訴えた「子供たちの未来のため」にこたえるためにも、先進国から途上国への政府開発援助(ODA)の増額が必要です。

今週の論文紹介

彦根市観光に経済効果～彦根城周辺観光の拡張可能性～

著者：経済学科准教授 とくだまさあき 得田雅章

収録：滋賀大学社会連携研究センター 平成 23 年度地域連携活動報告書



概要：

本論は、2011年8月～2012年3月に滋賀県彦根市から委託された調査研究「平成23年彦根市観光に関する経済効果測定調査」から得られた指標を元に、彦根城周辺観光の拡張可能性について考察したものです。

観光調査は2007年以降毎年実施されているものであり、最新の調査結果は2011年のものです。すでに彦根市ホームページ上で報告書が公開されているように、暦年の調査結果を波及推計まで行ったうえでその翌年の3月に公表する調査報告書は、速報性において全国的に希少なものです。それゆえ、行政サイドにとっては交通・観光関連施設整備等の観光都市整備のための1次資料として、民間事業者にとっては需要予測を行うための、そして一般市民にとっては市の観光施策の現状を知るうえで有益な資料となることが期待されます。

2011年の彦根観光を考えるうえで、3月に起きた東日本大震災とその後の原発事故は外せません。震災当初は、犠牲者や被災者および被災地のニュースを連日のように目にする中、観光にうつをぬかしてよいのかと自粛ムードが漂っていました。一方では、被災を免れた地域が積極的に景気を牽引せねばならないと、逆の対応も見られました。全国的に観光に対する方向性が定まらぬ中で、彦根の観光が展開されてきたといえるでしょう。本市は幸いにも被災地から遠く離れて位置するため、旅行客層の顕著な変化は見られませんでした。東海地域からの観光客比率が若干上がっていました。東日本方面への観光を西日本方面へシフトさせた可能性があります。

観光に対するネガティブ要因としては、高速道路の休日特別割引（休日千円）が6月に終了したことが挙げられます。天候については、5月と9月に記録的な大雨に苛まれ、夏季は前年ほどではないものの猛暑となりました。屋内観光施設の乏しい本市観光は、ある程度の影響を受けたのではないかと考えられます。逆にポジティブ要因としては、NHK大河ドラマ「江～姫たちの戦国～」で湖北エリア（一部では彦根市も含む）がクローズアップされたことが挙げられます。近隣の長浜市では「江・浅井三姉妹博覧会」が盛況を博し、多くの観光客が訪れました。本市にも周遊観光や石田三成人気といった大河効果のいくばくかの恩恵があったと考えられます。2節では観光調査から推計された2011年の彦根市観光消費額および経済波及効果の概要を提示します。3節で観光施策に関する考察を行い、4節では試算を行っています。

著者のつぶやき

今年も秋以降に調査を実施する予定です。これまで共同研究者として頑張ってくられた山崎一真特任教授が一線を退かれ、新たに石井良一教授とともに頑張っています。

教員紹介 「御崎加代子」

私の専門分野は「経済学史」で、滋賀大学経済学部では「経済学史Ⅰ・Ⅱ」、「現代経済学史Ⅰ・Ⅱ」などの科目を担当しています。研究テーマとしては、大学院生時代から、フランスの経済学者レオン・ワルラス（1834－1910）の経済思想にとりこんできました。ワルラスの経済理論は、現代経済理論とくにミクロ経済学の出発点になり、私たちに大きな影響を与えています。ワルラスの構築した一般均衡モデルは、市場経済の効率性を数学的に証明しようとしたもので、現代では市場原理主義や市場万能主義の根拠とみなされることがよくあります。しかし実際にワルラスが生涯持ち続けた目標は、社会正義の実現でした。現代経済学の創設者であるワルラスが、効率と公正の両立という、極めて現代的なテーマにどう取り組んだかを解明するのが、現在の私の研究課題です。



このような研究課題に関して、数年前から科学研究費の交付を受けており、英語論文の執筆や国際学会での研究発表を中心に活動しています。2008年には、スイスを拠点とする「国際ワルラス学会」（AIW）の会長に、日本人として初めて選ばれ、2010年まで同職をつとめました。最近の大きな仕事としては、ユネスコ（UNESCO）から、同機関が編纂しているEOLSSという世界最大の教育・研究統合知識ベースの執筆者の一人に選ばれ、「ワルラシアン経済学の歴史、哲学、発展」という論文を寄稿しました。このように国際的な研究活動を、今後も続けてゆきたいと考えています。

私の座右の銘は「柔よく剛を制す」です。この言葉はいろいろな意味で、私の仕事に役に立っています。また10年ほど前に、フランスでの長期在外研究から帰国して以来、日本の文化に強い関心をもつようになりました。そこで華道（小原流師範修得）や着付けを習い、現在は、日本の美しい四季のうつろいを楽しむ生活をおくっています。

みさきかよこ
経済学科教授 御崎加代子

リスク研究センター通信

リスク研究センターセミナー報告

滋賀銀行経営管理部リスク統括グループの椋昭夫課長をお招きして、「地方銀行の信用リスク管理」に関するセミナーを7月6日（金）に開催しました。

セミナーでは、はじめに信用リスク管理の概要・意義・体系などの説明、次に銀行業務の中核でもある貸出審査や与信管理全社的なポートフォリオ管理の視点に基づく信用リスク管理の概要について説明していただきました。さらに、信用リスク管理における内部格付け制度の意義を説明いただくとともに、この内部格付けを対象債務者に開示して、債務者の財務上の問題点やその改善方向を示す等の債務者とのコミュニケーションを推進する滋賀銀行の取組みの紹介をしていただきました。

セミナーの最後に司会の鈴木康晴准教授から、「①信用リスク管理は単に銀行の損失抑制策との意味だけではなく、積極的にリスクをコントロールしながら収益機会を最大化するための手段と考えることも可能であること。②銀行が信用リスク管理をうまく行えば信用創造を拡大し、ひいては地域経済の活性化に貢献しうること」等のお話がありました。そして、「健全かつ地域に役立つ銀行を実現するために、信用リスク管理がいかに重要であるか理解できたものと思います。」とのまとめの言葉があり、セミナーは終了しました。（ファイナンス学科准教授 鈴木康晴）



「リスクフラッシュご利用上の注意事項」

本規約は、滋賀大学経済学部附属リスク研究センター（以下、リスク研究センター）が配信する週刊情報誌「リスクフラッシュ」を購読希望される方および購読登録を行った方に適用されるものとします。

【サービスの提供】

1. 本サービスのご利用は無料ですが、ご利用に際しての通信料等は登録者のご負担となります。
2. 登録、登録の変更、配信停止はご自身で行ってください。

【サービスの変更・中止・登録削除】

1. 本サービスは、リスク研究センターの都合により登録者への通知なしに内容の変更・中止、運用の変更や中止を行うことがあります。
2. 電子メールを配信した際、メールアドレスに誤りがある、メールボックスの容量が一杯になっている、登録アドレスが認識できない等の状況にあった場合は、リスク研究センターの判断により、登録者への通知なしに登録を削除できるものとします。

【個人情報等】

1. 滋賀大学では、独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律（平成15年5月30日法律第59号）に基づき、「国立大学法人滋賀大学個人情報保護規則」を定め、滋賀大学が保有する個人情報の適正な取扱いを行うための措置を講じています。
2. 本サービスのアクセス情報などを統計的に処理して公表することがあります。

【免責事項】

1. 配信メールが回線上的問題（メールの遅延、消失）等によりお手元に届かなかった場合の再送はいたしません。
2. 登録者が当該の週刊情報誌で得た情報に基づいて被ったいかなる損害については、一切の責任を登録者が負うものとします。
3. リスク研究センターは、登録者が本注意事項に違反した場合、あるいはその恐れがあると判断した場合、登録者へ事前に通告・催告することなく、ただちに登録者の本サービスの利用を終了させることができるものとします。

【著作権】

1. 本週刊情報誌の全文を転送される場合は、許可は不要です。一部を転載・配信、或いは修正・改変してblog等への掲載を希望される方は、事前に下記へお問い合わせください。

*尚、最新の本注意事項はリスク研究センターのホームページに掲載いたしますので、随時ご確認願います。

(<http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2/3:12>)

*当リスクフラッシュをご覧頂いて、関心のある論文等ございましたら、下記事務局までメールでお問い合わせください。

発行：滋賀大学経済学部附属リスク研究センター

**編集委員：ロバート・アスピノール、大村啓喬、金秉基、久保英也、
柴田淳郎、得田雅章、宮西賢次、山田和代**

滋賀大学経済学部附属リスク研究センター事務局 (Office Hours:月一金 10:00-17:00)

〒522-8522 滋賀県彦根市馬場 1-1-1 TEL:0749-27-1404 FAX:0749-27-1189

e-mail: risk@biwako.shiga-u.ac.jp

Web page: <http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2>